

歩幅は小さくても、着実な一歩を

上 廣 哲 治

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

昨年は先師の逝去にはじまり、私にとつてもわが会にとつても大きな試練を経験する年となりました。しかし、いつまでも悲しみに暮れているわけにはまいりません。今こそ顔を上げ、先師たちが切り開いた倫理の大道をひたすら前へ前へと進んでいかなければなりません。そのことは皆さま自身がよく理解されているようで、全国の会場からは「改革」の成果を告げるうれしい報告も届いております。

今年、わが会は創立七十五周年に向けての「もの前」の年を迎えています。登山にたとえれば、霧の晴れ間からまたひとつ大きな峰が見えてきたところでしょうか。峰が見えたからといって、ここで肩に力を入れ大股で歩きはじめたら、体力がつづきません。それよりも一歩一歩、ゆつくり歩を進めることに努めていただきたい。「今日一日」の実践を着実に積み上げていってほしいと思うのです。

日々の実践の大切さを説くにあたって、先師はよく中国の古典『大学』の一節を引用しておられました。それは、「苟に日に新たに、日に新たに、又日に新たなり」というものです。今日の行いは昨日

よりも新しく善くなり、明日の行いは今日よりも新しく善くなるよう、修養に心がけなさいという意味で、殷の時代の湯王は、この言葉を沐浴用の盥に刻んで、毎朝自戒していたといわれます。

さすがに盥にまで刻むことはないでしょうが、この言葉を座右の銘にしていた実業家は多いようです。経団連の会長を務めた土光敏夫さんしかり、現在のパナソニックを一代で築き上げた松下幸之助さんしかり。その松下さんの側近として知られる実業家の江口克彦さんは、「日に新たに」という言葉について、次のような興味深いエピソードを記しています（『東洋経済オンライン』二〇一五年一月）。

事業を始めて間もなくの頃、松下さんは、自身が特許をとったある製品の工場を訪ねました。工場の主任は突然の来訪に驚き、工場内を案内しながら、「さすが親父さんですね。親父さんが考えはった、そのまま、今も造っております」と説明しました。それは、松下さんを喜ばせようという思いからの発言だったのかもしれませんが。

ところがそのひと言を聞くと、松下さんは突然顔色を変え、主任を厳しく叱責したということです。「あんたは、なにをやっとるんや。それで主任か。いつまで、わしが考え造ったものと同じものを造っとるんや。あんたの工夫はどこにあるんや。この製品の、どこにあんたがあるんや」と。

このエピソードには、松下さんが「日に新たに」という言葉にどのような思いを込めていたのかが示されています。昨日の仕事はどうだったか、今日は昨日より進んだかたちで仕事をしているかを、日々考えなければならぬ。そうでなければ個人も組織も成長しない。「これが昔からのやり方だ」とか、「先輩がやってきたやり方だ」というように、旧態依然のままではいけない。今やっていることがこれでいいのかを、常に考えながら仕事をすべきである……というのです。それは、われわれの日常の実践

にもいえることです。

日本には「年忘れ」という言葉があり、年の暮れに一年間の労苦を忘れるための宴うたげを開く風習があります。外国人には珍しい風習のようで、「日本人はそうやって過去のことをなんでも忘れてしまう」などと揶揄やぶされることもあります。歳時記をひもとくと、あの松尾芭蕉まつお ばしょうも年忘れ、つまり忘年会に顔を出していたようで、「せつかれて年忘としわすねるきげんかな」という句をのこしています。

「自分にはその気はなかったのだが、門人や知人からせつかれて年忘れの宴に顔を出した。だが、行ってみると煩わづらわしいことを忘れることができ、なかなかよい機嫌になった」といった意味でしょうか。たしかに外国人がいうように、都合の悪いことを忘れるだけでは困ったものですが、年忘れや新年という「けじめ」は、惰性だせいに陥りがちな日々に変化を与えてくれるもの。そして、清新な気持ちで新たなことにチャレンジする意欲をかき立ててくれるものです。

私たちの実践は、いつもうまくいくわけではありません。失敗や挫折はつきものですし、落胆することもあるでしょう。しかし、それを引きずってはいけません。一歩も前へ進むことはできません。年のはじめも一日のはじめも、「やり直し」の機会を与えてくれます。その機会を大いに利用し、昨年より今年、昨日より今日と、常に自らを改革していく気持ちを奮ふるい立たせていただきたいと思えます。

ところで皆さんは、いくつもある実践課題のうち「今日は何をしようか」と迷うことはありませんか。あれこれ考えすぎて、結局は何もしなかったということがあるのではないのでしょうか。「なんでもいい、思い立ったことをすぐに実践すればいい」と申し上げても、重い腰がなかなか上がらないのが現実のようです。そこで、ひとつの「歴史秘話」をご紹介しますおきましょう。

アメリカ合衆国建国の父と呼ばれるベンジャミン・フランクリンは「自伝」のなかで、自らが実践した「道徳的に完璧な人間」になるための方法を紹介しています。彼はまず、自分が達成すべき徳目として、「節制」「沈黙」「規律」「決断」「節約」「勤勉」「誠実」「正義」「中庸」「清潔」「平静」「純潔」「謙讓」の十三項目を挙げます（それぞれの具体的な内容に関心のある方は、「フランクリン自伝」をご覧ください）。そして毎週ひとつずつ「今週の課題徳目」を決め、その週はそれだけを集中的に実践し、十三週ですべての徳目を実践するようにしました。

そのために彼は、縦軸に十三の徳目、横軸に各曜日を並べた「週間チャレンジ表」のようなものをつくりました。たとえば、今週の課題を「節約」と決めたら、それをひたすら実践する。そのうえで一日を振り返り、できなかった徳目の欄には黒丸をつけていくのです。週間目標を達成できれば、ほかの徳目に黒丸がついていても、「節約」の欄は空白になっているはずですよ。そして、十三週の実践を四回繰り返せば、ちょうど一年になるというわけです。

気が遠くなるような試みで、あまりお勧めはできませんが、自らの実践の成果を振り返り、次なる目標を立てるためのヒントにはなると思います。フランクリンにとっても、これはかなり困難な実践だったようで、結論からいえば、「道徳的に完成の域」には達することができなかったといえます。とはいえ、そんな努力をしたおかげで彼は、「人間もよくなり幸福にもなった」と記しているのです。

もちろん、フランクリンのような厳しい目標を立てる必要はありませんが、「今日一日の実践」を積み重ね、つねに反省する心を失わない心構えは大切です。「もの前」の年の一年、一つ一つの歩幅は小さくても、着実に次の峰を目指す皆さまの姿をしっかりと見つめていきたいと思えます。